

# 静原 〈里人の生活〉



唐櫃に納められた「鶴・亀・蛇」などの神饌（静原神社における春と秋の例祭）

静原しずはらは古くは「志津原」とも表記され、四方を山に囲まれた洛北の奥深くに位置する集落です。東は江文峠えふみを隔てて大原に、西は薬王坂やくわうざかを越えて鞍馬や花脊はなせ方面に至る交通路に位置していました。このことは単に人の往来や物流のみならず、信仰上の往還路としても重要だったため、往古より注目された里でした。したがって平安時代から静原は、文学作品や歌集にも記されるようとなりました。

室町時代になると、十六世紀前半には鞍馬寺による田畑山林の買い取りが行われますが、賀茂社がそこに税をかけたため鞍馬寺と争いとなり、室町幕府は賀茂社の税徴収を禁止しました。静原の集落は賀茂社との関わりも深かったようで、江戸時代の地誌によると、上賀茂神社の社領に属して、葵祭には葵を献上していたようです。また静原城が集落北方の城谷山じょうやまに築かれており、岩倉の地侍山本氏の居城となっていました。やはり地勢による城造りだったといえるでしょう。

江戸時代は南禅寺や相国寺などの領地で、石高は三九〇



静原の景観

石余でした。ちなみに明治時代初頭の戸数は九十六軒、人口は五六一人。農業や林業に従事する村落でした。江戸時代、静原村は合議制による自治機能が発達していました。このような村では伝統行事も厳格に守られていることが多く、現在も静原神社の春と秋の例祭には、その名残をみることができます。宮座（祭祀組織）の形態を残すなかで、特に注目されるものとして神様に献上する食べものである神饌しんけんがあげられます。伝承された食材加工によるお供え物は、宝永五年（一七〇八）三月に新調された唐櫃からびつに納めて祭礼に供えます。この唐櫃側面には賀茂社の神紋である立葵たちあざわらびが描かれており、静原と賀茂社の結びつきの深さを改めてうかがい知ることができます。

静原の景観は、山を背後にしてなだらかな傾斜地に家屋がならび、そのもとに田畑が広がっています。一望するに、その美しさは実にすばらしいものです。先人が築いてきた歴史や文化を、自然の美とともに守り伝えてきた集落です。

# 鞍馬

## 〈信仰と伝統〉



鞍馬寺歡喜院の祈禱札（天明4年(1784)～享和2年(1802)）

鞍馬は四方を山に囲まれ、集落を縦貫する鞍馬川に沿って里人の生活は営まれてきました。平安京が造営される頃、都の北方を守護するためこの地に毘沙門天像を安置したのが、鞍馬寺の起源といわれています。中世に至っては長引く戦乱のなかで、鞍馬は京都と丹波・若狭方面を結ぶ軍事的要衝としても注目され、また都の貴族たちの逃避地であったりもしました。

鞍馬川流域に軒を連ねる山間集落ではありませんでしたが、鞍馬寺門前の寺院村落としての存在は、半僧半俗的な性格をもつ特異な里人を形成しました。それは今も続く仲間組織をみることによってわかります。構成は「七仲間」といった独自のものです。大惣仲間、宿直仲間、名衆仲間、僧達仲間、大夫仲間、大工衆仲間、脇仲間といった七



鞍馬火祭 (鞍馬火祭保存会提供)

つの仲間をもち、なかでも大惣仲間は中世以降、惣中のなかで中心的立場にありました。現在も鞍馬竹伐り会（京都市無形民俗文化財）の主役を務めています。宿直仲間は鞍馬寺に宿直して寺務を果たし、名衆仲間は鞍馬火祭（京都市無形民俗文化財）で名高い由岐神社ゆきの神事に関わりました。この三仲間は、最も勢力がありました。各仲間は世襲であったため、鞍馬の伝統は長年にわたってしっかりと継承されてきました。

鞍馬の家並みは、鞍馬街道に沿って南北に延びる美しい景観をとどめています。母屋と納屋を街道に面して並べたり、太い柱、粗い平格子、広い土間など鞍馬特有の古い民家が軒を連ねます。往時は洛北や丹波方面の炭集散地として炭問屋が並び、たいそう賑わっていました。産物としては、木芽の葉を塩漬した木芽漬が有名だったようで、すでに平安時代後期の歌集に記されています。現在は木の芽煮なきという製法でもって、鞍馬寺門前の名物として知られています。

背後にそびえる鞍馬山は、山全体が古い樹木や原生植物に恵まれ、すばらしい自然環境を備えています。洛北幽境の地として、いつまでも守り伝えていきたいものです。

# 貴船〈社と里人〉



貴布祢社の境内絵図〔「貴布祢山絵図」天和3年(1683)・重要文化財・上賀茂神社蔵〕

貴船神社の鎮座地一帯に発達した集落が貴船村です。貴船神社は江戸時代までは「貴布祢社」と記す場合が多く、読みも濁らないのが本来のかたちです。集落はこの貴布祢社の東側を流れる貴船川に沿うように点在しており、明治時代初頭では十八軒(九十三人)あったことが知られるところから、おおむねその程度のまとまりを維持してきたと考えられます。

貴布祢社は平安時代前半の史料である『延喜式』に記された古社なのですが、同時代後半には上賀茂社(賀茂別雷神社)の摂社とされていました。そもそも貴布祢社は賀茂川の水源地に祀られたことから、平安時代以降は治水の神、あるいは祈雨祈晴の神として崇敬されてきました。また数々の和歌にも詠まれてきたところから、広く知られた社だったことがわかります。ただし貴布祢社と上賀茂社の確執は根深く、江戸時代を通じて貴布祢社は上賀茂社の摂社ではないことを訴え、訴訟を重ねます。上賀茂社からは、社家のなかの役職者二名が「貴布祢社詰番」



江戸時代の「貴布衾詰番所日記」（貴船神社蔵）

として派遣されていました。彼らが書き記した日記が、今も残されています（写真参照）。

貴船村には自治を主導する家が数軒あって、彼らは「貴布衾惣代」「貴布衾社神人」として活躍するのですが、上賀茂社の支配を嫌い、訴訟を幕府に起こす中心的立場でもありました。しかし結果は変わることなく、上賀茂社の支配下に組み込まれ続けて幕末まで至ることとなります。そして明治時代を迎え神社制度が改変されるや、上賀茂社から独立し貴船神社として官幣中社に位置づけられました。

村の生活に注目すると、江戸時代の石高は僅か九石余で、年貢は免除されていました。しかし日々の暮らしをするうえでは確たる現金収入を凶らねばなりません。その手段として薪炭類の販売がありました。貴船は京都と丹波方面を結ぶ流通経路でもあったため、地の利を生かした営みが積極的になされたのです。

現在は貴船神社への多くの参拝者、そして京の奥座敷として夏場人気の川床。洛北屈指のスポットとして大変賑わっています。時代の変化とともに景観は変われども、貴船の歩みはしっかりと刻まれ続けています。

# 二ノ瀬 〈顕彰の軌跡〉



奉先堂の全景（江戸時代末期）

二ノ瀬は鞍馬川と貴船川の合流地点からさらに南流する鞍馬川沿い、またその河川と並行する鞍馬街道沿いに発達した集落です。北は鞍馬寺門前、南は野中を境として、往古より街道沿いの往来繁多な地域でした。中世においては上賀茂神社領としてや禁裏御料所などになった時期もありましたが、二ノ瀬が大きく注目されるようになるのは、江戸時代からでした。

村高約三十五石全ては、林家の知行地でした。林羅山はやしらかたが徳川家康から与えられて以降、二ノ瀬は林家の領地として明治時代まで続きました。林羅山とは江戸時代初期の儒者で、幕府儒官林家の祖です。初代家康から四代家綱までの歴代将軍に仕えて講義を行い、また幕政整備にも大きく貢献しました。

二ノ瀬にはこの林家との深いかわりのなかで、同家の家廟である奉先堂ほうせんどうが建立されました。羅山没後の延宝二年（一六七四）、庄屋今江清長の尽力によって廟所は落成し、羅山の遺品や著作物が納められました。以来、林



林家歴代の墓石

家歴代の命日には供物も献上されるようになりました。林家廟所は二ノ瀬の里人の手によって、長く守護されてきたのでした。しかし明治維新後は荒廃してしまい、ついに奉先堂はなくなりました。現在貴重な資料は京都市歴史資料館にて大切に管理されています。

昭和四年（一九二九）、鞍馬電気鉄道（現叡山電鉄鞍馬線）が二ノ瀬を通過して鞍馬寺近くまで営業するようになると、その恩恵を受けるようになりました。今も二ノ瀬駅の風情には、格別なものがあります。また集落は鞍馬川の流れとともに独特の情景をかもしだしており、特に夏場の風通しの良さは二ノ瀬の住み心地のすばらしさを物語っています。狭隘な生活道路に沿って点在する集落をゆっくり散策してみると、はるか昔のよすがを偲ぶことが出来ます。